

風景を読む

ハンガリーのミレニウム行事

盛田 常夫

ハンガリーのミレニウム行事は、インシュトヴァン国王の王冠移送だった。国立博物館から国会議事堂に移すことにどれほどの意味があるのか。今の時代、王冠で国民の民族主義や団結を煽るといっても時代遅れだし、そもそもあの王冠はオリジナルなものではないから、それを崇拜の対象にしようとするのは、民主主義の為政者がおこなってならないことだとする厳しい批判もあった。一つだけ弁護するとすれば、ミレニウムドームを建設したり、豪華な花火にお金を使わずに、ささやかな出費で千年を祝う行事になったことだけは確かだ。

1月1日の夕刻、国立博物館から国会へ移送が始まった。これに先だつ午後の国会ではミレニウム特別議会が開かれた。ちょうど午前中にコーシャ・糸見宅を訪問し、この特別議会には議員の家族が招待されていることを知った。もちろん議場にはなく、傍聴席にである。議会終了後、議員たちが王冠の到着を見守るといったことだった。

不謹慎なことだが、「もしかして」という好奇心が働いた。ひょっとして、この特別議会の議場に幼児を同伴する議員がいるのではないだろうか、と。子供を預ける所がないと、会社に平気で子供を連れてくる習慣がある。オルバン首相はワールドカップの決勝戦に合わせてシラク大統領を非公式訪問し、1席しかない貴賓席に長男を連れてサッカーを見せていたことから推察すると、多分、特別国会でも議員の1-2人は子供を議場に入れるのではないだろうか、と。

ユーロスポーツでフランスの選手がシラク大統領から優勝メダルを受け取る背後にオルバン首相がおり、しきりに下を向いて何か話しかけている奇妙な映像が映し出された。息子に話しかけているだろうことが即座に想像されたし、実際そうだった。ハンガリーの多く人も、これに気づいていた。家族を大切にするというのが FIDESZ の一つの唱い文句だし、オルバン首相は意識的にそれを演出しているが、ワールドカップの一件はどうみても地位の利用としか考えられない。家族を大切にすることと、地位を利用して家族に特別な配慮をしてもらうというは違う。この種の公私混同は、ハンガリーだけでなく、旧社会主義国に普遍的に観察できるのが興味深い。

多くの旧社会主義国でもそうであるように、現在のハンガリーでも、地位の利用とか、公私混同という観念が存在しないし、それが犯罪を構成することはない。政治家や官僚の地位を利用した経済犯罪で摘発されたものはこの10年間、皆無である。面白いことに、それはハンガリーだけでなく、チェコでもポーランドでもそうだという。市場経済になって、「何でもアリ」になったことが原因だという人がいるが、この説明は間違っている。

こうした社会的慣習や「奇妙な」振る舞いは、私の見るところ、旧体制からの遺産だと思っている。旧共産党幹部が自らの子弟の勉学や地位に特別の配慮を払っていたことは良く知られている。社会主義の理念は建前ばかりで、縁故者を優先的に優遇していたことを人々は良く知っている。新しい世代や時代になった今、新しい社会の建設を担う若者は、こうした旧弊を批判し、それを脱却する努力をする道を探るのだとばかり思っていた。ところが、如何に。子供が親を真似るように、若い世代の FIDESZ は、権力を握ったとたんに、旧体制の政治家と同じ振る舞いをするに何とも違和感を感じていないようだ。

トルジャンが大臣に就いた途端に、高校卒業の息子の嫁を MALEV の経営委員会に押し込んだことが問題になった。トルジャンは「嫁が大学教育を受けられなかったのは、ボルシェビキでなかったからだ。この任命はそれを補償するものだ」と論陣を張った。結局、分が悪くなり、この任命を取り下げたが、小さな政府組織に親戚縁者をこまめに入れている。これなども典型的な旧体制の行動様式だ。もっともトルジャンは FIDESZ ではなく、最初からそのような振る舞いをしてもおかしくない人物だと見られているからまだ良い。

さて、その MALEV だが、FIDESZ がこの春に任命した社長が、機体のトラブルが相次いで夏には辞任するという一件があった。このヘルナディという青年社長は、ハンガリー最大の企業 MOL の社長と小さな銀行の頭取も兼任している。ハンガリーを代表する会社の三つの社長を兼ねるといのは、いくら何でも無責任ではないか。こういう任命の仕方は、旧体制の経営者の政治的任命とちっとも変わらない。フェリヘジ空港でトランクが開けられる不祥事が続いている最中、こういう経営体制ではとても改善できないだろうと納得したものだ。幸い、トランクから盗みを働く一団が摘発されたので、しばらくは安心だが。

話は戻ってミレニウム国会の議場だが、テレビの中継を見ながら、大統領の演説の内容はそっちのけで、映し出される議場に目を凝らして見た。やっぱり、いるいる。保育園児を連れた議員が一人いた。ところが、まだいる。私が勘定しただけで、3名の議員が保育園児のような小さな子供を膝に抱え、大統領の演説を聞いている。子供は退屈そうに、机に乗りだしている。ミレニウム国会というのは千年に1回のセレモニーだ。そこに訳の分からない幼児を連れてくるというのは、どういう神経なのだろうか。もっとも、それ以前に、そういう議員に注意する衛視はいないのだろうか、同僚議員はどうして注意しないのだろうか。それが不思議でならなかった。こういう大事なセレモニーに幼児を同伴し、議場に入れる国があるだろうか。ロシアでもありえないというと、ロシア人に叱られるだろうか。村の議会ではあるのだろうか。

後日、この話を糸見さんにしたら、ネクタイをせずに、セーター姿の議員もいたという。幼稚園の父兄会とミレニウム国会が同じレベルなのだ。いったいこの国のプロトコルはどうなっているのだろうか、というのが話題になった。

ハンガリーが王国だった時代には、とても考えられなかったことだ。私が今、分析対象にしているのは、こうした社会的行動のルーズさの背景にある旧体制の社会的規範や倫理である。体制転換の過程で旧体制の社会的規範や倫理がどのように持続し、変容を被って

いくのかというのが、テーマだ。

共産党組織の厳格さは良く知られている。そうした厳格さと、このルーズさは似てもにつかない。しかし、問題の根源は同じ。ここにある。共産党の厳格さは軍隊を真似たものだ。だから、そこには民主的な合意とか、自発的な規律というものがない。規範や規律は外から強制されるもので、市民的な自発的規範として育まれたものではない。だから、共産党を一步出れば、生活や仕事の規律は限りなく緩んでいた。市民生活で横の水平的な関係を発展させて、市民的な規範を作り上げるといふ市民社会を構築する社会的なモーメントが欠落していた。存在していたのは、お上の共産党とどううまくやるかだけだった。

こうした縦社会からは市民の自発的な規範や規律が生まれにくい。兵役を終えたら、後は思い切り楽しもうというのが、自然な感覚だろう。まさに旧体制の社会は、共産党を離れた所では、精いっぱい禪を緩めるといふのが、生活習慣になった。規律の厳しい共産党組織を一步出た世界に一般的に観察される「ゆるふん」がこれだ。

マトルチ経済大臣が就任して間もないこの春に、長時間話し込む機会があった。何でも言ってくれといふので、まずミレニウム国会のことを話題にした。いったいハンガリー国会のプロトコールはどうなっているのだと。彼も、そういえば、自由民主連合の議員が子供連れで、かつ大統領の演説が始まってから遅れて入場してきたなと気にしている様子ではあった。

もう少し締めるところはちゃんとしてくれないと、投資家も困るんだという話をした。会社に子供を連れてきては仕事にならないし、他の仕事の邪魔になるだけ。会社に若い女の子がいれば、四六時中、若者から電話あって、仕事にならない。ヘリアホテルのプールの受付にいても、必ずボーイフレンドからの長電話で、お客への対応は二の次だ。いったい今の青年はどうなっているだ。そんな暇があるなら、仕事や勉強をもっと真面目にしたらどうか。仕事と私的な生活が分けられないといふのは旧体制と同じだ、と率直に批判的な意見を開陳した。

もっとも、ハンガリー人のルーズさは短所でもあり、長所でもある。アバウトなところは、仕事をやるのに都合が良い場合もある。でも、もう少ししっかりしないと、EU加盟の実体にそぐわないだろう。所得水準が西側に収斂していくだけでなく、社会の基本的な価値観もある程度は収斂させないといけない。こういう社会的規範や倫理、経済的犯罪者を罰する社会的公正観の確立も、ハンガリーにとって大きな課題だ。ポシュタバンク事件や「オイルゲート」のような大事件でも、誰一人逮捕されないといふのは、どう考えてもおかしい。それがモラルハザードを蔓延をさせている。

私には、議場への幼児同伴、ワールドカップの見学、経営者の政治的任命、あらゆる経済犯罪の赦免、盗難車の買い戻しなど、一連の社会現象は同じ根から出ていると思えて仕方がない。日本人もあまり大きなことはいえないが、やっぱりハンガリーにはもっとちゃんとしてもらいたい。